

てんかん学ハンドブック 第3版

兼本浩祐 ● 著

東北大学大学院教授・てんかん学 中里信和

本書の著者、兼本浩祐先生にはファンが多い。患者や同僚たちのほか、彼の講演を聞いた聴衆たちが次々とファンになるのである。著者の豊富な知識と経験だけではなく、人間的な魅力に惚れていくのである。直感的とも感じられる鋭い洞察力、患者に対する優しさ、そして軽妙な語り口。同じ理由で本書『てんかん学ハンドブック』は、前版から多くのファンを抱えていた。簡潔・明瞭で、かつ楽しい教科書というものは、そうあるものではない。

てんかんは有病率約1%の「ありふれた病」であるが、けっして安易に診療できる疾患ではない。日本の患者の約8割は、てんかん診療の専門的トレーニングを受けていない医師によって治療されているといわれる。したがって、一部の専門医のためだけの教科書よりは、非専門医や医学生、あるいは患者が手に取ってみたくするような教科書が必要とされていた。

てんかんという疾患に対して、本書は基礎・診断・治療までの広い範囲をカバーしつつも、簡潔かつ明瞭という著者の執筆方針が貫かれている。専門的な最新情報に関して

も、改訂を重ねるたびに組み込まれ、決して専門医を飽きさせることがない充実度である。この第3版では新規に登場した抗てんかん薬についても掲載されている。2010年の国際分類に対する戸惑いについても触れられており、これは多くの臨床医が同意するところであろう。

本書のファンになる近道は、コラム「事例」に紹介された物語に目を通すことである。「排尿後失神のため失職しそうになったお抱え運転手」から「フェノバル中毒のため2年間這って暮らしていた女性」までの30例に、てんかん学の面白さが凝縮されている。オリヴァー・サックスの名著『妻を帽子とまちがえた男』と同様の技法である。正しい知識とていねいな診療が一人の患者の人生を次々に変えていく。この「事例」を読めば、本書の中身をもっと詳しく読みたいと思うようになるだろう。てんかん診療医には、別のコラム「臨床メモ」と「視点論点」も面白いはずだ。著者はこのコラムを書きたいが故に、本書を出版したのではないかと私は勝手に想像している。

教科書の本文には、よく整理され



た目次と包括的な索引が用意されている。医師も学生も疑問が生じた時点で辞書のように使うのがよいと思う。読んだところには、次々と赤鉛筆でアンダーラインを引き、ポストイットを挟み、あるいは自分のメモを書き込むのがよい。

これから私は大学病院でてんかん科に臨床実習でやってくる学生たちに、初日に本書を紹介したいと考えている。実習期間内に本書の全部を読み終える必要はないが、てんかん学とはこのように奥深く、かつ楽しいものであることを理解して欲しいからである。さらに私は、ツイッターとフェイスブック上でフォロワーたちにも本書を薦めている。そのうち患者が本書にしおりを挟んで病院にやってくる日がくるかもしれない。

A5 頁368 2012年
定価3,990円
(本体3,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01539-4]

医学書院刊